

「いま・ここ」の心の声に寄り添って

医療と教育のはざまにいる子どもたち

1

子どもの心の声を聴きたい



昭和大学大学院保健医療学研究科准教授・附属病院内学級担当

副島 賢和

そえじま まさかず 病気のある子どもたちの学びの保障を考えています。「学ぶことは生きること」「一人じゃないよ」「どんな感情も大切に」を伝えるかわりをしていきたいです。ホスピタルクラウン（病院のピエロ）としても活動。

自己紹介をします

今回から連載を始めさせていただきます。副島賢和と申します。東京都の公立小学校の教員を二五年間務めました。最後の八年間は昭和大学病院の院入学級の担任でした。七年前に現職に就いてからは、病気のある子どもの教育の在り方を考えています。今は、大きく五つの仕事や活動をしています。

一つ目は、都内の院入学級を定期的にまわり、子どもたちにかかわらせていただいています。学校心理士として、病院の外来の診察室で子どもたちやご家族、学校の先生方のご相談を受けることもしています。

二つ目は、大学で医療系の勉強をしている学生さんたちに心理学や病気のある子どもたちの発達について、教育系や心理系の勉強をしている学生さんに病弱教育（病気のある子どもへの教育）について講義をしています。

三つ目は、小・中学校で、「いのちの授

業」や道徳の授業をさせていたり、教員研修をさせていただいたり、特別支援学校で子どもたちへのかかわりを一緒に考えさせていただいたりしています。

四つ目は、全国の子どもホスピスプロジェクトのアドバイザーやアンバサダーとして、命のリスクの高い子どもたちに、学びや遊びを届ける活動をしています。

そして五つ目は、あかはなそえじ（ホスピタルクラウン）としての活動です。

この連載では、それぞれの立場で子どもたちから教えてもらった、自分も相手も大切にするかわりに必要なことをお伝えします。皆さんの近くにいるお子さんたちとのかかわりを考えるヒントにさせていただけるとうれしいです。

心の声を聴きたい

連載の初回は、どの立場においても一番と言ってもよいほど考えていることをお伝えします。それは、「きく」ということです。とても難しいことですよ。だからこそ、一緒に考えていきましょう。

『リゆうがあります』（PHP研究所）というヨシタケシンスケさんの絵本をご存知でしょうか。子どもたちも大好きな絵本です。ネタバレになるので詳しくは言えませんが、子どもの行動にはその子なりの理由がある、ということが描かれています。「言い訳させてよ!」と書いてあるのです。

子どもの行動には必ず、理由や意味があります。

かつて私は、子どもの声を聴こうとすればするほど、子どもたちに「理由を言いなさい」「言葉で説明しなさい」と叫んでいました。もちろん学校は、自分の思いや願いを言語化する学びを行う場所です。しかし、そのときその子は、言語化できなかったから、行動化や身体化をしたのでしょうか。言葉にできるのはいいや考えのほんの一部なのに…。行動や言葉として表現されて私に見えているのは、その子の伝えたいことのほんの一部だと、それをわかっているはずなのに…。

言語化させることの優先順位が高くなく、その子の気持ちや考えよりも、言語

化されたことをすべてとして「あなたがそう言ったでしょう」と対応している私がいきました。

小林正幸氏（東京学芸大学教授）から教えていただいたことがあります。

「心の声を聴く」ということは、相手の感情を表情や行動から読み取り、言葉にするのを手伝えること」ですと。

感情の後ろにある願い

子どもの行動の後ろには、その子の感情があります。感情は、信頼できる人に自分の願いを届ける役割を持っています。つまり、子どもの行動の後ろにあるその子の願いを探す必要があるのだと考えています。

受け取り難い行動や感情をもらうときがあります。その子を守るためには、「ダメなものダメ」「やるべきことはやる」と行動を容認しないことは大切です。しかし、その前に、その子の感情をしっかりと受容することが必要です。この順番

を間違えると、「わかってくれない!」となってしまうでしょう。

怒りの感情の後ろには「変われ」という願いが、悲しみの感情の背後には「助けて」「喜びの感情には「増やして」「つらい・苦しい」という感情には「取り除いて」という願いがあると言われています。「怒ったり泣いたりしている子どもの後ろにある願いは何かかな?」

と考えながらかわると、今までよりも一緒にいられる時間が長くなり、その子の心の声を聴けるようになってきたようになります。

「一番大切に行っているのは最期の最後までで患者様の声を『聴く』ということですから、緩和医療のドクターに教えていただきました。大切なことは、いつでも誰に對しても同じなかもしれません。

これからも、子どもの心の声を聴くことができるように、行動や感情の後ろにある願いを受け取れるように、想像力を身につけて子どもに寄り添っていきたいと思います。